

歌舞伎を観たことはありますか？私は大学生の頃、授業の一環として初めて歌舞伎を観ました。詳しい演目や役者の名前はもうおぼろげですが、生身の役者が演じる舞台にただただ圧倒されたことはよく覚えてています。

歌舞伎は伝統芸能であり、現代の大衆芸芸でもあります。現代に生きる私たちが観ても充分おもしろい劇ですが、江戸時代から連綿と紡がれてきた伝統や「お約束」を知ることで、歌舞伎はさらに楽しくなると思います。この本では「隈取」「見得(みえ)」「女方」など歌舞伎を観る上でポイントになるキーワードを、実際の演目を例に出しながら、肩ひじ張らずに解説しています。例えば、悪役の「藍隈」は「フォースの暗黒面」、ゴレンジャーの登場シーンは「白波五人男」がモデル、等々…。この本を読めば、きっと歌舞伎が観たくなくなります。歌舞伎のおもしろさを知らないなんてもつたいない！ぜひ本書を読み、劇場へ足を運んでみてください。(丸山)

ニッポンの文化探訪③

この時期になると百貨店や子どものおもちゃ売り場に五月人形が並びますよね。角や五文銭などをあしらった豪華でたくましい甲冑姿を見ていると「どんな仕組みになっているのかな？」と好奇心がわいてきます。どうわけで、今回は『甲冑のすべて』を紹介したいと思います。伊達政宗や直江兼続といったお馴染みの戦国武将たちの甲冑や、国宝に指定されている甲冑の写真が豊富に載っています。眺めているだけでも十分満足できますが、本書の解説を読むとより楽しむことができます。

甲冑の成り立ちは古く、古墳時代にはすでに後世の甲冑で武装される部分は完備されていたのだそう。現代で甲冑と言って思い浮かぶような姿になるのは平安時代からだそうですが、そんなに古くから存在していることに驚きました。

そしてなんと、甲冑の着方も載っています。これからGWの旅先で甲冑を着ることにならうとも、この本を読んでおけば安心ですね！(生盛)



やよいTOPIX 本と出会う。

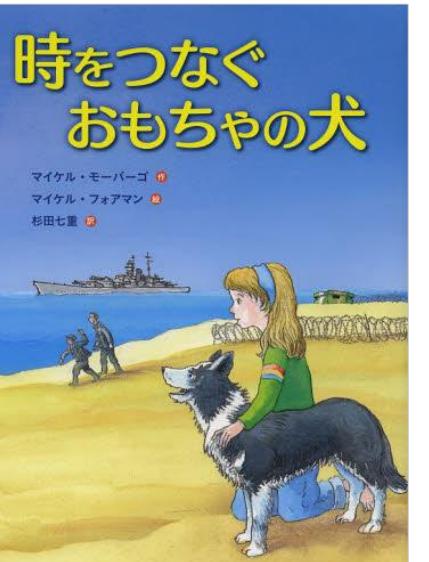
「世の中にはこんなにハントコなものにこんなにリアルなものがあるのだ！」



①

矢内賢二／著 新潮社(新潮選書)
退屈な入門書よ。
さとうなら——
胸躍る「芝居見物」の
新たなスタンダード、
ここに誕生。

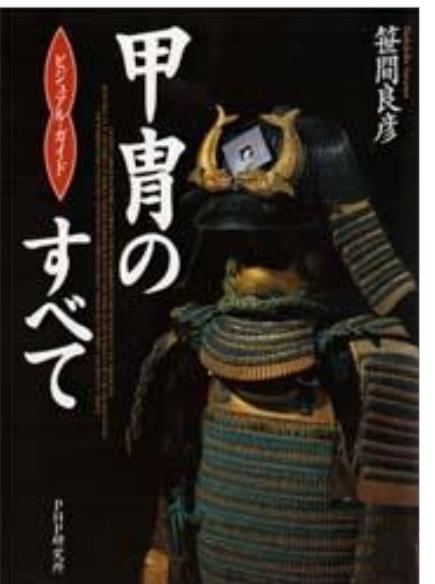
矢内賢二



②

マイケル・モーバーグ／作
マイケル・フォアマン／絵
杉田七重／訳 あかね書房

こんな本もありますよ
『昭和30～40年代みんなの想い出アラバム』
宇山あゆみ／著 河出書房新社
『おもちゃ絵芳藤』
谷津矢車／著 文藝春秋

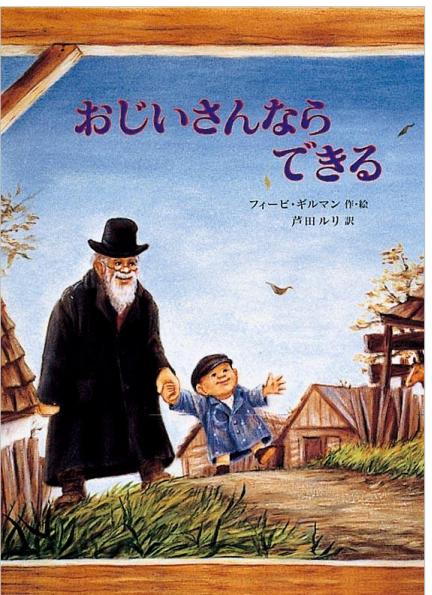


③

甲冑のすべて
笹間良彦／著 PHP研究所

④

おじいさんならできる
フィービ・ギルマン／作・絵
芦田ルリ／訳 福音館書店



再生館 セレクト④

こちらのコーナーでは、あだち再生館のおすすめ講座と、講座に関する本を紹介します。

5月のおすすめ講座は、「リサイクル体験講座「ハンカチで作るペットボトルカバー」です。お気に入りのハンカチを使って、ペットボトルカバーを作ります。

『おじいさんならできる』では、古くなってしまったブランケットが次々に別のものへ生まれ変わっていきます。お気に入りの品は、できるなら長く手元に置いておきたいもの。この絵本のように、ちょっとした工夫で身近なものとして使えるようにできたら素敵ですね。

| | |
|---|--|
| 「ハンカチで作るペットボトルカバー」 | |
| ■日時：5/15（火）午前10時～正午 | |
| ■対象：区内在住・在勤・在学の方 | |
| ■内容：ハンカチを利用してかわいらしいペットボトルカバーを作ります。 | |
| ■申込：電話・窓口または住所、氏名（フリガナ）、電話番号、「ペットボトルカバー」をハガキ・ファックスで送付 | |
| ■費用：200円 ■持ち物：裁縫道具 | |
| ■場所・問い合わせ先： あだち再生館（月曜日、祝日休館） 〒120-0011 中央本町2-9-1 TEL：3880-9800 FAX：3880-9801 | |

5月5日といえば子どもの日…ですが、「おもちゃの日」でもあることはご存知でしょうか？日本玩具協会・東京玩具人形問屋協同組合が、「子どもによいおもちゃを与える」となどを目的に制定したのです。

今回紹介する本は『時をつなぐおもちゃの犬』。課題図書にも選ばれた、第二次世界大戦中の悲劇と、国を超えた友情のお話です。主人公は、イギリス人の少女チャーリー。チャーリーは、母グレースが木でできたおもちゃの犬「リトル・マンフレート」をとても大事にしています。ある日、チャーリーと弟、そして飼い犬のマリーが浜辺で2人の男性と出会ったところから、「リトル・マンフレート」と母の秘められた物語が明らかになっていきます。

実はこのお話は、いくつかの実話を元に作られたものなのだろう。戦争が題材ではありますが、悲しいだけではなく、読後は温かな気持ちになります。(松野)